

「二つの月」

千葉県 そうねいじ 總寧寺住職 てるい 照井 ぶんりゅう 文隆

中秋の名月

深まりゆく秋の気配、きんもくせいの香り、虫たちの声、野辺を彩る小さな花たち…澄んだ夜空に月が輝く美しい季節となりました。

今日は10月1日、今年の中秋の満月の日です。「芋名月」の名の通り、旬の味わいもひとしおの、うれしい秋の盛りです。

月は太陽の光を反射して、日々形を変えながら時に姿を隠しても夜空を離れる事はありません。かつてこの国の暦は月の満ち欠けをもとにつくられていましたので、月は生活の指針やさまざまな恵みのもとになっていました。そんな月に季節や気象状況、満ち欠けしてゆく姿をもとにたくさんの名前を付けて愛でてきたのも人々の月に対する親しみの現れでしょう。

二つの月

「峨山さん、月が二つある事を知っていますか？」師である瑩山さまの問いに答える事が出来なかった峨山さまに瑩山さまは言い放ちました。「月が二つある事が解からないようでは、おしえを継がせる訳にはいきません。」以後、より一層精進を重ね続けた峨山さまは、坐禅中に瑩山さまが指を鳴らす音を聞いて二つの月の答えを得たと伝えられています。

二つの月とは、天に在る月と心の中にある月を表しています。天の月は、佛のおしえを象徴し、心の月は、その光を受ける自分自身です。天に在る月が普く全世界を照らすように、佛のおしえもまた同じように私たちに包んでくれています。心に在る月は、佛のおしえという光を受けて輝きを増し、自らが全世界を照らす月となってゆくのです。佛のおしえは言葉や文字で理解する（天の月を見る）ものではなく、日常の中で実際に行じてゆく（心の中の月を輝かせる）事で本物になる、という事だと私は思っております。

自分自身の二つの月に

ところで皆さんは自分の心の中にも月がある事に気付いていますか？その月は、日々さまざまな光（あり余る情報等）を受けて光ったり曇ったり、常に満ち欠けをくりかえしています。いつも満月ならばいいのにな、と思いたすがなかなかそうはいきませんし、無理に満月にする必要もありません。満ち欠けをするからこそ月なのですから。大切なのは月の満ち欠けに拘らず、常に穏やかな心で丁寧に生きてゆこうと願い、それを実行する事です。普く照らす佛のおしえに包まれて、心の月を輝かせて下さい。